

鎌倉三日会新年会記念講演（平成三二年一月二〇日）

## 大倉幕府跡の開発と中世史研究の現状 東京大学

名誉教授（日本中世史） 五味文彦

（実朝の死から八百年・見えない鎌倉の魅力）

最近、源実朝が亡くなつてちようど八百年ということで、国宝館で特別展がひらかれていきます。出版社や新聞から「実朝についてどう思うか」といろいろ聞かれます。ただ鎌倉では実朝についての動きは国宝館でやるぐらいであり、こうした機会を通じて鎌倉の魅力は伝えるべきだと思います。しかも実朝が遊んだところは永福寺でしたが、国から遺跡整備費をいただき、私もその整備委員としてかかわってきました。でもそれについて積極的に伝える

ことがなかったというのは、ちよつと残念です。

観光で鎌倉に来る方は沢山います。でも大体はどこかで食事をして、おみやげを買つてそのまま帰つてしまふ。それでは鎌倉の魅力とは何かがなかなか見えてきません。

私が世界遺産にかかわるようになったのは、こうした鎌倉ではなくて、鎌倉の街に住んでいる人々が静かな生活を送りながら、自分の街の魅力を外に伝えていくような形での世界文化遺産を考えたからです。でもちよつと不安でした。というのも鎌倉の現状はその方向でうまくいっていない。いろんなものを立ち上げても途中で挫折してしまうのです。

世界遺産は行政が中心になつて進めます。私は学問として研究をしているので、行政にコミットすると、どんどん行政にひきず

られ、おかしなことになるかねない。辞めた方がいいのではないかという風に思い、言われたのですが、いやそうではなくて、行政にコミットしてもしっかりしたものを残していくことが使命であろうと考えたのでした。

たまたま文化庁の史跡指定を審査する第三専門調査会に属して、世界遺産特別委員会が設けられるようになりました。今までは国が主導権を握つて、遺産の候補を選定していたのですが、地方・地域から「これを候補にしてほしい」と手をあげて、それを国が審査するとともに、何を候補にすべきかを考えることになり、世界遺産特別委員会が設けられたのですが、たまたま私がその委員長になつてしまったため、世界文化遺産にかかわるようになり、鎌倉にもかかわりをもつことになりました。

（鎌倉の世界遺産登録について）

一生懸命やつたつもりだったのですが、残念ながら鎌倉は今回は無理ですということ、第三七回世界遺産特別委員会の審議前に、不登録の可能性が高いという通知があつて、不登録の決議が会議で行われてしまうと、もう二度と無理ということ、それを回避するために取り下げたのが現状です。

難しい問題がありました。富士山と一緒に登録申請したので、危ないなと思つてはいました。富士山の方は強力な政治家がバックにあつてやつていましたし、全国的な支援組織もありました。次からの登録は年一回に一つ、と決まっています。そのため鎌倉は余り審査されてないのではないかと、という雰囲気がありました。た　り政治の問題や、イコモス（世界遺産登録のための国際会議）の意向、鎌倉らしさをしっかりと受けとめるような国際機関

がほとんどないことを考えると、危ないと思っていたのです。

イコモスはモニュメント、つまり不動産を中心に登録しています。組織はヨーロッパで生まれていますから石の文化が中心、木材の文化となると、遺産として残らないだろう、と消極的なのです。やっとこの頃、日本でも努力して、木の文化が認められ始めています。

日本はたくさん文献資料が残っていますから、これを利用してよいように思われますが。これは無形文化遺産としか見られていません。例えば、鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』があり、金沢文庫には多くの記録・文書がありますが、それらは遺産には指定されないのです。本来ならば総合的に文化遺産として登録すべきなのに、そうはならないという事情があり、日本は非常に苦勞を強いられています。

そもそも日本は世界文化遺産に名乗りを上げるのが非常に遅かった。なぜなら国が史跡としてしっかり保存しているから、世界遺産のようなものに名乗りを上げる必要がない。と考えていたからです。十年位遅くなったため、遺産として認められるには、遺産を価値づけるコンセプトが必要になってきました。以前だったら、認定は簡単だった。古都京都の文化財、古都奈良の文化財、法隆寺等特別にコンセプトは必要がなかったのです。その時にしっかり対応すれば、鎌倉は極端なことを言えば、鎌倉大仏だけでも世界遺産に指定されたのですけれど、鎌倉は史跡を整備して登録することに乗り気ではなかったのです。

現在、登録申請しているところは、皆それぞれ苦勞しています。鎌倉と一緒に名乗りを上げた彦根城は、姫路城が先に登録されているものですから、もう同じような形では登録されないとされています。一つの手段としては「シリアル」といって、「日本の古城」

として、国宝になっている城をまとめて登録すれば、拡大申請の形で出来るのですが、姫路城は頑としてそれを受け入れないという事情があります。単独で登録しているから魅力があるのであって、他の城と一緒にしては困るといふ訳です。佐渡の遺産も実を言えば、石見銀山が既に世界遺産になっているから遅れをとって今苦勞しています。

#### （鎌倉の市民運動）

鎌倉について振り返ってみますと、急激に都市化が進むなかでおきた市民運動、鎌倉三日会が関与したことのある御谷騒動を通じて、昭和四一年に「古都における歴史的風土に関する特別措置法」が生まれました。鎌倉が中心になってこの法律が出来た訳ですが、それに上手く乗って、京都も奈良も、古都として特別措置法が適用されたのです。この市民運動が文化財や遺跡を保存する運動の先駆けとなったと言えますので、非常に名譽な事だと思います。逆に三日会は当初は重要な役割を担っていたのであるが、その後何をしていったのかと問われかねないことになります。

鎌倉が脚光を浴びるに至ったのは、昭和六〇年、鎌倉駅の西側の御成小学校の建て替えに絡み、今小路西遺跡で、大小の武家屋敷が発掘され、その下には古代の鎌倉郡の郡家（郡衙）遺構と推定される官衙施設跡が発掘されました。この今小路西遺跡の発掘が全国の中世の考古学研究を牽引するようになったのです。鎌倉はこの時期までは先進的だったのですが、その後、後輩である平泉のような、文献などが殆ど無い所が一生懸命頑張つて中世考古学が展開してきたのです。福井県の一乗谷遺跡や広島県の草戸千軒遺跡の発掘などです。

### （不備が目立つ鎌倉の「都市」としての調査）

鎌倉研究はこのように始まり、中世都市研究会も発足しました。やがて平成四年に世界文化遺産に登録を進める事になり、「古都鎌倉の神社、寺院など」が暫定リストに載ってユネスコに提出されたのです。しかし先ほど述べましたように京都、奈良に遅れをとり、その結果、同じような形では登録出来なくなり、鎌倉の魅力を押し出してゆかなければならなくなりました。そこで三方山で囲まれた「城塞都市鎌倉」という考え方で登録が進められ、周囲の山々や、重要な地域での調査が行われたのですが、そもそも都市とは何かという問題が出てきました。ヨーロッパの都市とは全く違う、中国の都市とも違う都市の在り方なので、鎌倉を都市と言えるのかどうかという問題がでてきました。

都市であるならば、どのような計画性があるか、それがどのように保存されて来たのかということが求められます。保存されるためには、考古学的発掘がなされなければなりません。しかし山の地域にはそのような遺跡は存在しない。都市部においては、様々な発掘がなされていますが、それらが保存されていないという問題があります。殆どは住宅地の建て替えにより遺構はつぶされてしまい、見える形では残っていないのです。記録には残されませんが、ヨーロッパ風の概念であれば、検証が求められます。物証はなく、いろいろ貴重な物が出てきましたということでは、十分では無いのです。物があつたとしても、きつちりと整理されていないければならない。

実は鎌倉では発掘された物の整理がほとんど出来ていない。野村総研の跡地に放り込んであるだけで、非常におそまつです。それに関連して私は九州の福岡市の埋文センターを見に行ったのですが、そこでは大きな倉庫に膨大な資料が保存されていて、全

部整理されて、いつの時代の何であるかが調べられています。

鎌倉に博物館をつくらうというから、委員会まで出来たのですが、何時しかそれも無くなってしまう。鎌倉の場合、最初の勢いだけはいいのですが、持続性が無い。世界遺産登録のためには、持続が大切なのです。

### （コンセプト「武家の古都・鎌倉」）

このような問題がいろいろ生まれたことから、周囲の山の調査だけでは不十分ということになり、鎌倉歴史遺産検討会が設けられ、改めて遺産登録に向けて鎌倉の特質を考えることになりました。そこで考えられたのが「武家の古都・鎌倉」というコンセプトです。武家政権が鎌倉で生まれたが、世界的に見てどういう意味があるのか。現在でも世界には幾つかの軍市政権が存在しますが、大体は安定せずに潰れてしまう。しかし鎌倉ではそうではなかった。鎌倉幕府はその後潰れてしまいましたが、室町幕府、江戸幕府という形で続くことになったのです。なぜ継続していったのかを理解するためにも、武家政権の発祥の地である鎌倉の歴史をきつちり検証すべきであろうということになりました。

三方山といった風土の狭い鎌倉という土地で、当時の武士たちには粗野な人達が多かったのですが、彼らがいかにして平和裡に過ごすようになったのかを調べ、後世に遺産として伝えるべきである、ということから、平成一六年に中間報告書「武家の古都・鎌倉」がまとめられたのです。

その柱になるモニュメントは、鶴岡八幡宮、大仏、建長、円覚両寺です。鎌倉幕府は神社・寺は荘厳で立派な建物を造るが、政権の中心になる御所にはあまり金を掛けない。大倉御所、宇都宮御所、若宮御所について、はつきりした遺跡が残っていないのは

そのことによるのである、という見方は苦しいなりにそれなりに説得力があると考えました。

平成二三年三月の国際会議を経て、平成二四年に富士山とともに登録を申請しました。平成二三年三月の国際会議は、例の東日本大震災が起きた時のことで、会議に出席された方々は大変苦勞をされたと思います。鎌倉の世界遺産に向けて不吉な予感がしたこととも記憶しています。

### (不登録の理由は何か)

第三七回世界遺産委員会の審議前に、鎌倉は「不登録」決議回避のために推薦を取り下げることとなりました。予め伝わってきたのは、武家の古都といながら武家の拠点であった御所が残っていないことや、都市の遺跡に関わる発掘体制がしっかりしていないことなどです。地下にこれだけの遺構があるのに、見える形で表示されていない。発掘はしても、ここには何かが在りましたという記録が残るだけに見える物が無い。

使われた材木に関してあまりに多すぎて、きちんと調査されていない。中にはすばらしい材木を使った形跡があるのですが、それについても総体的に調べられていない。すべて記録保存で遺構が廃棄されているのです。

遺物の管理も杜撰です。鎌倉の博物館や埋蔵物センターの構想も何度も提案されたが、消え去ってしまいました。私は、世界文化遺産の登録前にすべて造るべきであると何度も言ったのですが、市の説明は登録後に整備すること、これではどうしようもない。

今、存在するのは鎌倉歴史文化交流館ですが、ここも出来るだけ多くの人に見てもらいたければ、日曜も年末年始も開くべきで

す。九州の国立博物館は正月も開いています。大宰府に参詣する人々のためもありましようが。鎌倉の場合、近所の住民からうるさいとの抗議があったと聞いていますが、それについては市側が何度でも出向き、住民に説得を試みる熱意が必要とされるのです。世界遺産登録は「武家の古都・鎌倉」というコンセプトで進められてきましたが、都市の総体を遺産として登録することの難しさが問題となりました。計画的な都市設計の思想が鎌倉にはあまり認められないこと、基軸となるのは八幡宮と若宮大路だが、此処をどう整備し保存してゆくのかが見えてきません。

武家の古都と言いながら武家の拠点であった大倉御所についても全く動きがありません。当然ながら、宇都宮御所や若宮御所についても同じように、なにもなされていない。武家の政権を言うならば、拠点があるであろうに、それがなぜ記されていないかと言うのが問題です。

当時の鎌倉世界遺産登録の会議の時に、それだったらとても無理だから辞めると言って去った人も何人かいました。市は、積極的に周辺の跡地、現在清泉小学校がありますが、そこを発掘できるのかを調べる事さえしていない。もちろん学校がある所を発掘することは難しいでしょうが、発掘すれば必ずなにか出てくるはずです。我々はそれをして欲しかったのですが、市はやるうとしない。私もその段階で辞めようと思ったのですが、私が辞めるとどうしようも無くなると引き留められ、残ったわけです。

### (行政と学術研究)

富士山と二つを申請したことから富士山が優先された面もありました。当時の文化庁長官は鎌倉出身の方で、鎌倉を応援してくれると思っていたのですが、逆に鎌倉出身であるから、遠慮さ

れたようです。政治的思惑も絡んでいたのでしょうか。最初から富士山優先で、富士山には危ない所があるから鎌倉も併願しておいたということも考えられます。

これからの課題は、行政主導で学術検討は二の次という現状を何とかしなければならぬと思います。国の姿勢もおかしい。本来なら国が全部バックアップするべきなのです。中国でも韓国でも、こういう事業は国が行っている。日本では地方公共団体に任せておいて、上手く進めている提案を国が取り込む形になっている。上手く行かない場合は、あなた達が悪いのだという訳です。

鎌倉が世界遺産に登録されなかった事を嘆く必要はないでしょう。鎌倉では国に指定された多くの史跡の保存に力を注ぐべきでしょう。

### （史跡文化財保存の仕組みの構築）

これからどうしたらいいのかを考えると、やはり武家政権の跡地である大倉幕府、あるいは鎌倉の文化財をどう残すかです。そのためには、史跡文化財をしつかりと保存する仕組みを構築する必要があります。

それぞれの分野の専門の研究者を集めて、第三者委員会を立ち上げて、大倉幕府の遺跡保存を評価してもらう。そしてその評価に基づいて保存すべきであると国に提言した方が、市から国にお願いするよりも効果的だと思います。市には市民の財産を守るという役割もある訳ですから、どうしても消極的にならざるを得ない。大倉幕府についてもつと研究を進め、残すべきであるという答申を基に、国と交渉を進め史跡指定に持ち込むという方針が考えられます。

『吾妻鏡』によれば、治承四年一二月一二日の記録に、大蔵郷

に御亭（御所）を新造し、一〇月に頼朝は上総権介広常宅より、水干を着て、騎馬にて御所に入ったとあります。和田義盛以下多くの武士が控えていました。この日に武家政権が確立したとは言えないまでも、この地から始まったことがうかがえます。『吾妻鏡』にはこのような御所に関する記述が沢山あります。御所に関する学術的な研究をしつかりしておく必要があります。

鎌倉のこれからの課題としては、多くの観光客が鎌倉を訪れていきますので、これらの人々に出来るだけ多くの場所を訪れてもらう仕組みをつくって、外から来た人に、世界遺産にふさわしい魅力を感じてもらわなければならない。観光の圧力に負けない、鎌倉の風土、景観を守ることです。

鎌倉で生まれ育った人の魅力を外へ伝える事も重要だと思います。例えば源実朝です。実朝がいたからこそ頼朝がつくった政権が続くことになったのです。それから実朝に仕えた北条泰時です。泰時は日本で初めてしつかりした法律、『貞永式目』を作りました。それ以前の律令は中国の法律を真似たものでした。泰時が参考にしたのは律令以前の、聖徳太子の一七条の憲法です。これを法律と呼べるかどうか分かりませんが。聖徳太子の憲法に学んだからこそ貞永式目の条文は五一条、一七条憲法の三倍に当たります。さらに後の時代の建武式目も一七条、それから江戸幕府の基本法令も一七条、というように聖徳太子の精神が受け継がれています。

### （発掘・研究の成果の発信が必要）

それから発掘や研究の成果を発信し、鎌倉の魅力をもつと語って行く必要があります。今までこの部分が鎌倉の大きな弱点でした。私事になるのですが、鎌倉では何度か、八幡義信先生（神奈

川県文化財協会会長)にもご協力いただいて、シンポジウムを開いたことがあります。それを本にしようとしたのですが、考古学関係の人は誰も書かない、あるいは書ける人がいないのです。これは非常に良くない。

鎌倉研究の弱い点は、時期区分がはっきりしていないことにもあります。これは考古学と文献の研究が上手く行っていないことによります。寺社を中心に考えるのも良い方法です。鶴岡八幡宮、永福寺、寿福寺、大慈寺、鶴岡八幡宮寺、大仏殿、それぞれの時期にこのような建物が建てられ、中心に成って行く。それぞれの研究が必要なのですが、個々の事を知っていても他の分野については知らない研究者ばかりで、これらを総合的に研究している研究者がいない。鎌倉に関する辞書を作ろうとしたことがあったのですが、執筆者がいない状態です。

### (総力を結集して大倉幕府の研究を)

文献としては吾妻鑑、貞永式目、幕府裁判史料、金沢文庫史料と、これだけたくさんあるわけですから、これからの研究を頑張っただけなければいけないと思うのです。そのためにも御所に関する基礎的な研究をして行かなければならない。御所の建設が一九八〇年、再建が一九九一年、頼朝の死、和田合戦と十年ごとに事件が起きています。御所は簡素な建物ですから一〇年あるいは二〇年ごとに建て替える必要があります。火事も起きるでしょうから、このような出来事をつかり見極める必要があります。

大倉幕府はせいぜい源氏三代くらいしか使われていなかったのですが、それが基軸になるものなのです。研究というものは、基軸となるものがあれば、そこからぐつと広がって行くものです。基軸となるものが無いと、柱のような物を立てることが出来ない。

ですから大倉幕府の研究を、総力を結集して進めていただきたいと思うのです。三日会はそのバックアップをすることにより次のステップになる事と思います。

三日会のメンバーを見回しても、私と同年代(七十二歳)の方が多いように見受けられます。若い人を育てることも重要な事です。どの分野も後継者がいない事が大きな問題ですが、逆に後継者がいない事が、三日会の方々が中心になって組織して頂ければ、今後に繋がるのではないかと思います。

### (世界文化遺産の今後)

世界遺産の話に戻しますと、登録の傾向はモニユメントが中心であり、物証が求められること、更に不動産であることです。動産は駄目というのが一番きついです。教育遺産ということでも、水戸の弘道館や足利学校の世界遺産登録を目標に私も努力しております。ユネスコだから教育遺産はふさわしいであろうと思うのですが、物が無いとなかなか難しい。日本の教育は江戸時代には先進的な物であったのですが、不動産が無い。動産は沢山あるのですが、それでは記録遺産になってしまうのです。かつて大仏のような单体でも良かったのですが、今はコンセプトが必要になって色々な物を組み合わせなければなりません。そうすると他の遺跡との比較が行われることになります。

中世都市というヨーロッパの色々な都市と比較してどうなるかという事になるのですが、これがなかなか難しい。そうすると何が有利かとなれば、信仰とか宗教に関する遺産が有利になります。なぜならこれは比較のしようが無いからです。

平泉の場合も柳の御所など直接に宗教でない遺跡も残したかったのですが、結局遺産から外されてしまったのです。仏国土と

いう良く分からないコンセプトで登録されたわけですが、かえって訳が分からない方が良かったのかも知れません。もう一つ通りやすいものに産業遺産があります。産業遺産には国際的な組織がバックアップしており、このような組織を持つ所は比較的通り易い。ですから九州の近代化遺産もそのバックアップ組織に依る所が大きい。それもあつて次は佐渡が何とかなるだろうと思います。